

愚考考古学 ⑦

地名の起り「佐伯」・「地下」

中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

地名は歴史上の遺産であり、起源には深い意味がある。

以前、私は県境の宮崎県北浦町に行き、バス停の標識に「地下」とあるのを見た時、これは何と読むのだろうと思ったが、あいにく土地の人がいなくて、聞くことができなかったことがある。

私は、この地下(ちか)に珍しいものでも見つかったので、地下(ちか)と読むのだろうぐらいに考えて、あまり気にもとめず帰った。

ところが、その後上浦町のバス停で同じものを見、それに「ジゲ」と書かれているのを見て、「地下」を「ジゲ」と読むことを知った。

以後、郡内のあちこちに「地下」名があることを知り何か関連性があるのではないかと疑問を持ち、地図を頼りに調べてみたところ、この近くに次のような「地下」

が散在していた。

- ①◎上浦町最勝海浦地下
- ②◎佐伯市大入島久保浦地下
- ③◎同 荒網代浦地下
- ④ 鶴見町大島地下
- ⑤◎米水津村竹野浦地下
- ⑥ 蒲江町蒲江浦地下東・西
- ⑦◎同 河内地下
- ⑧◎同 猪串浦地下
- ⑨◎同 屋形島地下
- ⑩◎同 葛原浦地下
- ⑪ 宮崎県北浦町地下

◎印のあるものは、現在の地図にはないもの。

このほかに二、三「地下」と呼ばれている所がある

が、確認できない。

しかも、これ等の地名は、何故か海岸部のみに存在し山間部には見当たらない。

そこで、「地下」の意味について調べてみると、百科辞典には、

「地下」ジゲ、チケと呼び、昔、殿上に上ることを許されない(官位)五位以下の官人の称。

と、記載されている。

これでは、「地下」名の起源は理解できない。

先日、『豊後風土記』を読んでいたら、西暦七〇〇年ごろ、穂門郷(現・保戸島)の後ろに佐伯荘を置くところ、これが、佐伯の地名が文献に記載された最初のものであった。

また、『続日本紀』によれば、称徳天皇の神護景雲元年(七六七年ごろ)に、佐伯宿弥久良麿(さえきのすくねくらまろ)なる人物が、豊後の守(国司)として着任したとあり、官位は、従五位下であったと記載されていた。

佐伯の始祖は、大神惟基を始祖とする一族が移住し、土着して、佐伯荘をつくったともいわれているが、基はやはり佐伯宿弥久良麿のようである。

これで、「佐伯」と「地下」は結ばれるのである。

それは、従五位下で、豊後の守であった久良麿の下にいた五位以下の部下(地下)がとどまり、置かれていた所が、「地下」の呼称のはじまりだと思われるからである。

七〇〇年代といえば、わが国の政治が本格的に始まった大化の改新(六四五年)後で、地方政治の始まったころである。

私の考えでは、佐伯の荘は、豊後の守久良麿が、地頭その配下に地下が存在していたようであり、地下は地頭に對する呼称であったと推察する。

残存する地名から見ると、南郡一帯の支配権内に、地下(官位五位以下の者)が約十名程いて、地頭の指揮を受けていたとも推察できる。

もう少し「地下」を研究すれば、昔の統治の範囲や状況を解く鍵を持っているように思える。

このことは関係のないことと思うのだが、佐伯のはじ

まりが、佐伯宿弥久良磨であったとすれば、同時代に生きた空海（弘法大師）も姓氏が佐伯であったという。

直川村の黒沢地蔵は、弘法大師の足跡地といわれているが、久良磨と弘法大師が姻戚関係であったとすれば、噂も真なりである。

後の時代、つまり一〇〇〇年から一二〇〇年代にかけて、佐伯院と称する院がつくられ、小野市（宇目町）を編入していたとの記録や、佐伯荘の地頭は、毛利判官代殿、御家人は、佐伯弥四郎政直で、これらが領す（一二八五）の記録はあるが、七〇〇年代初期の佐伯荘は、やはり、現在の佐伯市内にあったと考えられる。

久良磨に関するものがあれば、そこが佐伯発祥の地であらう。地名・遺跡等から発祥の地を探したいものである。

